

## 弥生の出雲王に出会える

季刊

第43号

(2021年10月)



## 出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

★冬季企画展  
「弥生墳丘墓に  
供えられた食器」

11月6日(土)～1月31日(月)

今回の企画展は、出雲の弥生時代を中心に墓の上から出土する土器(食器)を取り上げ、当時の儀礼の様子を紹介いたします。

墓に飲食物を入れた食器を供えるようになったのは、弥生時代前期です。松江市堀部第1遺跡では、遺体を埋葬し石を配置した後、日常使いの小形の壺や甕などが置かれていました。これらの中に、胴部下半に孔(土器焼成後)が開けられたものがあります。また、江津市波来浜A区2号墓(弥生中期)の甕や鳥取市西桂見墳丘墓の壺(弥生後期)の底部に孔が開けられたものがあります。これらの孔には、土器を作るときに開けられたものがあり、飲食物を入れることでは



孔

堀部第1遺跡の土器  
(松江市蔵)

きません。はじめから儀礼用の土器として作られたのでしょうか。堀部第1遺跡の壺の孔も、儀礼前に開けたのかもしれない。

中期までは、1つの埋葬施設に日常使いの壺や甕が1～3点程度が供えられています。わずかに直口壺や高杯が出土します。墓に供える食器の種類が増えたことがわかります。

後期になると、供える土器の数が増えていきます。出雲市西谷3号墓第4埋葬の上から、220個体を超える土器が出土し、盛大に墓上儀礼が行われました。飲食物を入れた食器の多くは中・小形の

西谷3号墓の埋葬施設の上に  
置かれた食器(イメージ)

壺(甕)です。これらには孔が開けられたものではなく、ほとんどが水銀朱で赤く塗られていました。孔を開ける代わりに、赤く塗ることとで儀礼用の土器にしたのでしょうか。第4埋葬の隣の第1埋葬からは、ミニチュアの低脚杯が出土しており、実用品ではない食器もあります。

弥生時代の墓に供えられた食器をみていくと、実際に飲食物を入れたものや入れなかったものもあるようです。入れなかったものは実用品ではない「仮器」として、埋葬後、墓上に置かれました。

展示では、墓に供えられた食器を紹介し、その種類の変化や出土状況から、飲食物を供える儀礼の実像に迫ります。(坂本豊治)

西谷3号墓のミニチュア  
低脚杯(鳥根大学考古学研究室蔵)

## ★ギャラリー展Ⅲ

## 1964東京五輪の年の考古学

—そのとき何が見つかった?—

9月29日(水)〜12月13日(月)

この夏、57年ぶりに東京オリンピックが開催されました。世界中から集まったアスリートの活躍はなお記憶に新しいところでしょう。

この大会は、コロナ禍の中で、これまでとは異なる形で開かれました。コロナ禍の影響はオリンピックだけでなく、私たちの生活にまで及び、時代の転換点とも言えるでしょう。

前回の東京オリンピックが開催されたのは、1964(昭和39)年のことでした。当時も高度経済成長期の只中であって社会や生活が大きく変化を遂げていた時期で、オリンピックは戦後復興のシンボルと称されました。そうした中、各地の遺跡で発掘調査が行われ、考古学的な発見が相次ぎました。

今回の展示では、この1964年の考古学的な発見や動向に注目して、当時の世相を見てみたいと思います。

1964年、オリンピックが開催される3か月前の7月18日午前

から翌日未明にかけて山陰や北陸地方は豪雨に見舞われました。出雲市を中心に土砂崩れが頻発し、死傷者は109名、家屋全半壊1651戸にも上る被害となりました。

この豪雨の土砂崩れにより出雲市内の遺跡も被災し、「西谷の丘」では番外2号墓から1号墓にかけての西側斜面の一部が崩壊したとされています。また、神門町や湖陵町、多伎町内の横穴墓が多数崩壊しました。

その中で、当時、島根県立松江南高校の教諭で出雲市文化財審議委員として考古資料・史跡を専門にした池田満雄氏は、豪雨で姿を現した横穴墓を中心に発掘調査を行いました。当館へ寄贈された池田氏の旧蔵資料には当時の調査を記録した写真が残されています。今回は、その写真と調査で見つかった多くの須恵器を展示します。

また、池田氏は当時県内で行われた他の発掘調査にも関わっていました。その一つが松江市鹿島町の古浦遺跡です。

この調査は金関丈夫氏(鳥取大学・山口県立医科大学)や山本清

氏(島根大学)を中心に1961年から4年間行われ、弥生時代から古墳時代の48体分の人骨が確認されました。1964年の調査では額に緑青が残る頭蓋骨が見つかり、ヘアバンドを頭に巻き銅の飾り板を額につけた女性のシャーマンの骨と推定されています。

この他、国学院大学によって調査された松江市東忌部町の中島遺跡では、県内で初めて玉作工房跡が見つかり、その写真も残されています。

1964年の県内の発掘調査では、現在でも注目される資料が見つかっており、そうした品々をご紹介します。(高橋 周)



砂原小山横穴墓群(多伎町多岐)の調査

## ★「出雲弥生の森公園フレンドクラブ」さんが県知事感謝状を受けられました!

出雲弥生の森公園フレンドクラブ(会長 井上明男)さんには、「育てよう出雲弥生の森公園」を合言葉に、博物館開館以前から、西谷墳墓群史跡公園の除草・美化活動にご尽力いただいています。

この活動が評価され、6月29日環境保全功労者県知事感謝状を受賞されました。職員一同、心よりお祝いとお礼を申し上げます。

また、7月2日には、井上会長、内部副会長が受賞報告に来館されました。



(左から)井上会長、内部副会長、花谷館長



★速報展

「出雲平野のハニワ再発見

―斐川町「結古墳群」の円筒埴輪―

9月29日(水)～1月31日(月)

出雲市斐川町に所在する結古墳群は、1984～85(昭和59～60)年に、工業団地造成に伴って調査され、墳丘規模10m前後の小さな古墳34基が、丘陵上に密集して築かれていることがわかりました。

調査から35年経った2020～21(令和2～3)年、最新の調査・研究の成果を踏まえて、再整理を行いました。今回の速報展では、その成果の中から、「埴輪」にスポットを当てて紹介します。

埴輪は古墳の墳丘上に並べられる焼き物です。筒状の形をした円筒埴輪と、人や動物、家といった様々な物をかたどった、形象埴輪に大別されますが、結古墳群で出土したものは、前者の円筒埴輪です。

これまで、出雲平野で出土した円筒埴輪は、主に古墳時代後期(6世紀)のものでした。しかし、結古墳群の円筒埴輪は、出雲平野でほとんど確認されていなかった、古墳時代中期(5世紀)のもの

のであることが明らかになりました。

古墳群のなかでも、17号墳から出土した円筒埴輪は、量が多く、状態も良好でした。それらを詳しく分析すると、埴輪製作に関わった工房の規模や数といった、生産体制について知ることができました。また、17号墳の後に築かれた28号墳からも、円筒埴輪が出土しており、17・28号墳の埴輪を比較した結果、製作技術の変化も伺えました。

速報展では、このような再整理による新発見を、実際に出土した埴輪を交えて展示します。

(下江 裕貴)



調査中の結古墳群(1984(昭和59)年)と17号墳出土の円筒埴輪(左上)

★古文書の森をゆく⑧  
「木の使い方今昔」

木、と言われて皆さんは何を想像しますか。庭の花木、近所の雑木林、または家具や小物の材料等、様々な形があることでしょう。

近世以前の生活において木は決して欠かすことのできない重要な資材でした。家や船の建材や、箆(たね)やお椀など生活の家具や道具、日々の炊事や暖房の燃料にも木が必要で、そして社会経済を回すにも木は欠かせない資材であり財産でもありました。野山の木々は藩や村、或いは個人の管理下に置かれ薪や木炭になり、時として村同士の争論の原因にもなるほど重要なものでした。

出雲市内で発見された古文書では、1844(天保15)年松江藩から神門郡へ各村で管理する山に松を植えるように言い渡されています。松は油分を多く含みよく燃えることから燃料として需要が高く、出雲国全体で不足していたのです。植えた松を最低5年間は伐らないこと、これを破った者や他所から勝手に伐りに来た者への罰金等も定められました。松が立派な成木になるまで村全体で共

同管理し、伐採して売る時は平等に利益を分配することも定められており、松が重要な生産物であったことが伺えます。

これら松に関する事に加えて、屋敷の周りに簡単な柵ではなく生垣を作ること、更に屋敷の土地に空きがあれば棕櫚(しゅろ)と桐(きり)の木を植えるようにということも指示されています。この2種は、「陰手」という日当たりの悪い所でもよく育ち様々な用途に使える便利な木であると文中で語られています。棕櫚は繊維状の樹皮が箆(たね)や縄の材料になり、桐は軽く燃えにくい木質から箆(たね)等の材料として重宝されました。また、松江藩では桐の実から灯明用の油を採取することを奨励していました。桐の実(桐の実)は村で自由に売買できたため、現金収入にもなる商品作物だったのです。

江戸時代の人々は木の種類や特性に合わせて様々な活用をしていたのです。

(荒川 英里)



桐の実

★展示のご案内

▼冬季企画展

11月6日(土)～1月31日(月)

「弥生墳丘墓に供えられた食器」

●ギャラリートーク

11月21日(日)

12月11日(土)

1月9日(日)

※いずれも10時から

▼ギャラリー展

好評開催中～12月13日(月)

「1964東京五輪の年の考古学

—そのとき何が見つかった?—」

▼速報展

好評開催中～1月31日(月)

「出雲平野のハニワ再発見

—斐川町「結古墳群」の

円筒埴輪—」

★講座のご案内

▼ギャラリー展「2000年前の

弥生土器—出雲型広口壺の生

産—」関連講演会

12月5日(日)14時～16時

「土器をつくる人びと

—出雲型広口壺の

拡散の背景を探る—」

●受講料 無料

●講師 田崎博之氏

(愛媛大学名誉教授)

▼館長講座

出雲にまつわる歴史や文化財を分かりやすく解説する館長講座。今年度は「戦争記念碑」をテーマに開催します。

●受講料 300円

●講師 花谷 浩

第2回

10月23日(土)

「出雲地区の戦争記念碑」

第3回

11月27日(土)

「大社地区ほかの戦争記念碑」

※いずれも14時～16時

●申込受付中

※申込状況については

お問合せください。

講座の申込について

定員50名 当日受付なし

事前申込必須(電話・FAXのみ)

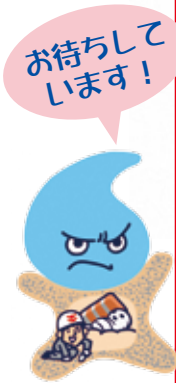
●申込受付時間 9～17時

●必要事項 氏名・電話番号・住所

※講座当日は、感染症予防のため、

マスク着用、手指消毒、体温測

定にご協力ください。



★館長古來夢

若い頃は夏空に沸き上がる入道雲を目にすると、無性に発掘現場に出たくなったものだが、今は日陰か冷房の効いた屋内に居るほうがいい。その若かった頃の話を、

ちょうど30年前の1991年春、私は奈良・明日香村のため池の底にいた。飛鳥池という灌漑用の池が不要になったので建設残土で埋め立てる計画が持ち上がり、明日香村がトレンチ調査していた。「ちょっと見に来てくれんかな」と納谷守幸さんに声をかけられ、

池底に降りた。トレンチ断面には真つ黒な土、いや炭と灰が1層も堆積し、おびただしい数のフイゴの羽口、鉄滓、ルツボの破片が含まれている。いつも掘っている宮殿跡や寺院跡とは異質な遺跡だと直感した。そう、これは飛鳥時代の工房遺跡、つまり工場跡であり、

炭や灰は当時の産業廃棄物だった。それから納谷さんと一緒に調査すると、出るわ出るわ、ガラス片にガラスルツボ、銅や鉄の切金、小型の仏像鋳型、木簡まで。七世紀後半に稼働していた飛鳥池工房遺跡の発見だった。

木簡の中には「大伯皇子宫」

と書かれたものがあつた。天武天皇の娘、大伯皇女(大来とも、661-702)の居所を示している。大伯皇女は伊勢神宮の齋宮を務めた最初の人物だった。だが、686年、同母弟の天津皇子が密告され謀反人として自害に追い込まれると、任を解かれて飛鳥に帰った。

『万葉集』にのる「うつそみの人にあるわれや 明日よりは 二上山を弟背とわが見む」は、二上山に葬られた弟大津を偲んだ歌だ。その大津を「彼の人の眠りは、徐かに覚めて行つた。」と蘇らせしたのは、折口信夫(『死者の書』)。大津の眼には姉の名を記した木簡はどのように映つただろう。

(花谷 浩)

(発行) 出雲弥生の森博物館

2021年10月

〒693-0011  
島根県出雲市大津町2760  
(TEL) 0853-25-1841  
(FAX) 0853-21-6617  
(E-mail) yayoi@city.izumo.lg.jp  
http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

- 入館料/無料
- 開館時間/9:00～17:00  
(入館は16:30まで)
- 休館日/火曜日  
(祝日の場合は翌平日)  
年末年始

